



平成 私のパチンコ史 ① パチンコ雑誌の行く末は

今年もあと2か月足らずとなりましたが、例年と少し違うのは「平成」という元号があと数か月で終わろうとしているところ。そこで今回から新元号に変わる5月まで数回に渡り、私から見たパチンコやそれを取り巻く平成史をまとめていきたいと思えます（※以下、年号は全て平成です）。

今回のテーマは「パチンコメディア（主に雑誌）」。「私は元年に「パチンコ必勝ガイド」という雑誌に投稿したエッセイが掲載されたのがきっかけで、ライターになった経緯があります。昭和から平成にかけてのパチンコメディアは、前回取り上げた「王様手帖」など既存フリーペーパーの他にファン向け雑誌が創刊し始め、まさに「黎明期」であったといえます。私は続々登場して来る雑誌を読みながら「パチンコに関することを書いて暮らせたらいいなあ」と考えていましたが、まさか平成年間ずっとそのように過ごせるとは夢にも思っていませんでした。

私に転機が来たのは5年。元年にパチンコ誌で一応デビューしたものの、最初は2年から遊技業界誌記者になり、ファン雑誌が急拡大する際声を掛けて頂くことが増えた5年から、フリーとなりました。その時は「何とか一人でやっていけるだろう」と思っていたのですが、当時のメディアをめぐる環境は「最悪」の一言でした。どういうことかということ、パチンコ業界の中には業界誌は「味方」、ファン雑誌は「敵」という概念が根付いており、私は味方から敵に寝返った存在だったのです。当時はメディアに女性が非常に少なっただけでなく、顔や名前を出していたこともあり、例えば新機種内覧会に行こうとしても受付で「バレて」断られてしまいます。パチンコが好きで、メディアでその良さを伝えようとする気持ちに全く変わりがないのに、カタログ一つもらうのにも大変苦労する日々が続きました。

しかし、平成6年以降頃には一般のTVメディアなどでもパチンコ産業を取り上げ

昭和から平成にかけて多数が創刊されたパチンコ雑誌の、今後の行方は……？



ることが増え、徐々に業界のファン雑誌に対する見方が変化（敵ではあるが、影響力は認め始める）していったように思います。そして10年以降、規制強化やタイアップ機種種の増加で、いよいよメーカーが雑誌の一般ファンへの影響力に注目し始めます。12年前後にはメーカー各社に広報窓口が揃い、広告掲載をはじめ積極的にファン雑誌への機種掲載に協力し始めてくれました。それまで、雑誌に載っている機種写真は多くを協力ホールで撮影していたのですが、メーカーで取材等ができるようになったことは、大きな変化でした。

以降雑誌メディアと業界との関係は、非常に良くなったといえる一方、あまりに「仲間（味方）」となってしまった弊害も見受けられるようになりました。例えば、機種を説明する表現にも必要以上に気を遣うなど様々な「忖度」が雑誌で行われるようになり、かつて「自由な表現＝面白さ」を謳っていたメディアの存在意義が薄れていきます。メーカーはホール、そして雑誌は読者が直接のお客さんであるはずで、業界に気を遣っていけば安泰という矛盾した存在になってしまったパチンコメディアが、果たしてファンに受け容れられ続けるのか……？ 今後のファン雑誌の在り方が、平成終盤になって問われようとしています。パチンコ業界側にも、適度な距離感や苦言を含めた緊張感を受け容れる寛容さが、改めて問われようとしているのではないのでしょうか。

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジコ、07年）